Interview

長谷川陽子　デビュー35 年、感謝込め　ベートーベンのチェロソナタ全曲に挑む

日本を代表するチェリストの長谷川陽子がデビュー35 周年を期して、ベートーベンのソナタ全 5 曲に挑む。東京で全曲演奏リサイタルを開くのに続き、月末には日本アコースティックレコーズから 2 枚組み CD を発売。「まるで別の世界に入ってしまったようなコロナ禍の中で、私を励まし、音楽を取り戻させてくれたのがベートーベンでした。その楽譜は『大丈夫、出口はある』と、心を照らしてくれる。誰もが不安を抱えている今こそ私の経験の全てを込めて、彼の潔さ、誠実さ、そして圧倒的な生命力を奏でたいと考えたのです」

バッハの無伴奏組曲がチェロ界の「旧約聖書」と呼ばれるのに対し、ベートーベンのソナタ 5 曲は「新約聖書」にたとえられる。若書きの 2 曲は「自身が得意としたピアノのほうが前面に出ていて、天真らんまん。まだ貴族の時代で、宮廷音楽の名残も色濃い」。それから歴史は大きくうねり、庶民の革命思想に共感した作曲家は、音符に感情を発露させるように。チェロも雄弁に語り出し、ピアノと自在にたわむれる。第 3 番は「ロマン派の幕開け」を告げた。

「後期の 2 曲は、連作でありながら対照的。第 4 番ではごく『私』的な愛情を描き、第 5 番では『公』の使命を果たすかのように、音楽の意味を厳しく問うています」。こうした作風の変遷を、長谷川は「常に新たな地平を開こうとしていたベートーベンの闘いの跡」とみる。イエスが自らの血をもって人類を救ったように、ベートーベンも私たちの苦しみの先達だったのかもしれない。

父はバイオリン、母はピアノをたしなむ音楽一家に生まれた長谷川が、なぜか心を引かれたのは、人の声に最も近いとされるチェロの音だった。「赤ちゃんの言葉にならないささやき。若者が張り上げる叫び。とつとつとしたおじいさんの語り……すべてを表現できるのがこの楽器です」。そして「新約聖書」には、あらゆる声の魅力が宝箱のように詰まっている。

9 歳で井上頼豊の門下に入り、日本音楽コンクール入賞を経て 10 代でデビューしたものの、第 5 番が特に難しく感じられ、敬遠しがちだったベートーベン。作曲家がソナタを生み出した年齢を超え、さまざまな経験を積んだ今、ようやく機が熟した。「好きなことを続けてきた 35 年分の感謝を込めて」、楽譜と向き合う日々だ。

音楽と並ぶ人生の導き手は「純粋な存在」である猫たち。中でも飼い猫「すばる」は確かな耳の持ち主だ。「まだこなしきれない曲をさらっていると、遠くの部屋へ逃げてしまう。逆に練習を終えて扉を開けた時、そこにすばる先生が座って聴いてくれていたら、『合格』のあかしです」

【斉藤希史子】（毎日新聞夕刊　2022/5/12）

▼私がまだ幼いころ、家に数枚の LP レコードがありました。その中の 1 枚がベートーベンのチェロソナタ。3番と4番が入ったレコードでした。パブロ・カザルスとルドルフ・ゼルキンによる歴史に残る名演奏。何度も聞きました。私は3番が好きでした。